2003-08

札響くらぶ

第25号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

平成15年度総会開催

弦楽四重奏も楽しむ

本年度の札響くらぶ総会が、５月19日午後６時から豊平館二階大広間を会場に開催されました。

上田会長と、札響の佐藤専務理事の挨拶の後、さっそく議事が始められました。議長に会員の武藤義則さんが選出され、例年通り、前年度の活動報告と決算書の審議、本年度の活動計画と予算案の審議が行なわれました。

会員の皆様には詳細な総会の報告が郵送されていますが、本年度の活動計画の中で注目すべきものとしては、会員名簿のシステム化、会員向けホームページの充実、仙台フィルハーモニークラブとの交流で仙台訪問を実現、札響東京公演へのツアー企画などがありました。また、議論も例年になく活発で、すべての議案は了承されました。

総会終了後、楽員有志のご厚意でドヴォルザークの弦楽四重奏曲「アメリカ」が演奏されました。出演は菅野まゆみ(Vn)、石突美奈(Vn)、遠藤幸男（Va)、櫻庭茂樹（Vc)の皆さんで、会員総立ちの拍手に、アンコールで応えて下さいました。

札響くらぶは札響を愛するファンの札響応援団です

指揮者に聞く

札響はもっと動けるオーケストラに!!

高関（たかせき）　健（けん）さん

札幌交響楽団正指揮者
群馬交響楽団音楽監督

札幌交響楽団　撮影：©佐藤雅英

高関　健さんのプロフィール

東京生まれ。幼少よりピアノとヴァイオリンを学ぶ。1978年桐朋学園大学を卒業後ベルリンフィル・オーケストラ・アカデミーに留学。その後、カラヤンのアシスタントも務めた。81年タングルウッド音楽祭で、バーンスタイン、小澤征爾、マズア、プレヴィン、マルケヴィッチの各氏に指導を受けた。各種の国際コンクールに優勝や入賞し、85年日フィルの定期でデビュー。

これまでに、広響音楽監督・常任指揮者、大阪センチュリー響常任指揮者を歴任、現在、群響音楽監督。札響には、1988年から92年まで専属指揮者として在籍。今年4月に正指揮者に就任した。

国内はもとより海外での活躍も目立ち、ヨーロッパ各国の主要なオーケストラに客演し、高い評価を受けている。

今年４月に札響の正指揮者に就任された高関さんに、７月14日ＰＭＦ公演の練習後、札幌芸術の森でお話を伺いました。お疲れのところ、快くお話し下さいました。

―― 前回札響にいらっしゃった時からは大分になりますか。

高関　1988年から92年までだったと思いますからもう11年くらいになりますね。

―― 今回札響の正指揮者に就任されたいきさつをお聞かせ下さい。

高関　実は、常任指揮者の尾高さんからは以前から、一緒にやらないか、というお話をいただいていました。しかし、私が群響と大阪センチュリー響で仕事をしていましたので、ちゃんとした形ではお受けできないかもしれないということだったのですが、この３月に大阪の契約が終わったものですから、４月からこちらに就任ということになりました。

―― 正指揮者に就任されての抱負をお聞かせいただけますか。

高関　自分としては、前回11年前の時は随分若かったと思います。未熟な部分も多く、あまり皆様の役に立てなかったのではなかったかと思います。11年たち私も年を取ったので、尾高さんを補佐しつつもう一度札響のお役に立てればという気持ちでいます。

それから、今札響は難しい時期を通り過ぎつつありますが、そんな時に私が少しでもお手伝いできることがあれば是非やっていきたいと思っています。

―― 現在の札響を高関さんはどのようにご覧になっていらっしゃるのか、まず、演奏についてはいかがですか。

高関　札響に初めて伺ったのは、今から17年前の1985年でした。その時の最初の印象も、随分しっかりとアンサンブルが出来ているオーケストラだ、と思いました。それから７年間くらい頻繁に振らせていただいた時期があったのですけれども、その時期に比べても、ここ10年の間で、演奏は随分充実していると思います。メンバーも充実してきましたね。ですから、これからもっともっと上手になっていくでしょうし、いい演奏をしていくと思います。この間の東京公演のエルガーなんか、とてもよかったです。

―― 経営という面からはいかがでしょうか。

高関　私は、どういう風に厳しいのかということが、本当はよく分かっていないのかもしれないのですが、オーケストラというのはやはりその経営上、きちんとした形での補助をいただけるということがないとだめだと思うので

す。今はすごく難しい状況ですが、自治体などにもよく考えていただいて、我々も話しに行ったりして、そういうものを少しでも増やして行ってもらうというのは、とても大事です。

―― 群響の場合と比較していかがですか。

高関 札響と群響とでは、置かれている環境そのものが違いますから、単純に比較は出来ません。その前提で申しますと、現在、群響の経営は比較的安定していると思います。その要因の一つは、音楽教室を多くやっていることです。しかし、その反面、やってみたい他の企画がなかなかやれないということにもつながっています。札響の場合は比較的少ないと思うのですが、でも、音楽教室のようなものは将来のことを考えれば、もっと出来ればいいなと思います。またそれ以外の、いろいろな企画の演奏会ができればいいし、今、だんだん始めてますよね。そういうものを、どんどんアピールしていかなければいけないと思います。それから、メディアに顔を出すことも大切ですね。

―― 高関さんとして、これからの札響に求めたいことをお聞かせ下さい。

高関 私は「地方のオーケストラ」という言葉は大嫌いなんですが、それぞれの街にあるオーケストラはですね、「動ける」ということが大事だと思います。札響の場合は、北海道という一つの枠がありますから、そこから出るのは難しいとは思いますが、これだけの演奏をしているオーケストラを、もっと全国的に聴いていただけるような形が望ましいですよね。函館まで行ったのなら、ちょっと足を伸ばして東北とか、東京公演の行き帰りにちょっと寄るとか、そういうことがあった方がよいと思いますね。

―― そういう面では、一昨年の英国公演が、楽員の皆さんの大きな刺激になったと思いますが。

高関 海外公演というのはとても大事です。本当にできれば良いと思います。群響も、今から10年近く前ですけれども初めてやりまして、それで群響が随分変わりました。オーケストラが一段階ぽっと上がったというのか、雰囲気が変わりました。

―― 札響・群響に限定せず、今の日本のオーケストラの状況をどのように見ていらっしゃいますか。

高関 ここ10年間、世の中がすごく落ち込みましたでしょう、その中ではオーケストラはそれぞれものすごく頑張ってやっていると思います。でも、10年前に比べると演奏回数も減っている、お客さんも減っている、それをどうやって増やすかということをすごく皆考えています。演奏会をやるだけでなく、子ども達を集めてクリニックをやってみるとか、随分そういうことを、それぞれのオーケストラがやるようになりましたね。そういう風に、もっと分かりやすい形でオーケストラを聴いてもらうとか、そういう方向に気を向けてますね。ただ、言えることは、オーケストラはここ10年くらいで、どのオーケストラも大変上手くなっています。それは、間違いなく言えます。

―― せっかくの機会ですから、群響の現況についてお聞かせ下さい。

高関 群響は、定期演奏会を年9回やっているのですけれども、入場者数は去年が一番多かったのです。ですから、聴衆は少しずつなんですが増えてきまして、定期演奏会の入りはかなり良くなってきました。ただ、メンバーを増やしたいのですが、予算の面からそれは出来ないという状況の中で今やっています。

―― 音楽ホール新築はどうなりましたか。

高関 その話は一つの大きな課題でして、今の群馬音楽センターは昭和36年に建てられ、建築学的にはデザインもいいんですが、音響はあまり良くないので、何とか新しいホールを作ろうと、皆で努力しています。そのためのチャリティーコンサートも一回やりましたし、様々な取り組みをしています。Kitaraのような素晴らしいホールがほしいですね。

―― 最後に札響くらぶに対して何かございませんでしょうか。

高関 応援団ですからね。一緒にいて下さるということだけでとても嬉しいし、札響をもりたてて下さる方達と考えています。大変な時期ですが、元々札響には潜在的にこれだけの演奏能力があり、いい演奏をしてきてますので、多くの方に聴いていただけるよう、一段のご協力をお願いします。　（佐藤良次）

“札響くらぶ”の皆様

仙台フィルハーモニークラブ（ＳＰＣ）会長　工藤　一郎

皆様、お元気ですか？

昨年12月14日の私どもの札幌訪問に際しては身に余る大歓迎を頂き、心から感謝申し上げます。その模様は私どもの機関誌「PHILHARMONY CLUB」Vol.24に特集記事として掲載し、全会員に報告させて頂きました。貴くらぶにも若干部お送り致しましたので、ご覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか。このような両団体の友好関係が、今後益々発展することを願いますと共に、皆様の仙台訪問が実現する日を待ち望んでおります。

さて、札響第459回定期（８月29日）に、仙台フィル常任指揮者の梅田俊明さんが登場します。

梅田さんは「指揮者」時代を含めて13年間、仙台フィルと共に歩んでこられ、楽員からも聴衆からも全幅の信頼を寄せられている実力者です。広いレパートリーの中でも、彼が作り上げるドイツ音楽の世界は、その虚飾の無い正攻法の解釈によって極めて高い評価を受けております。札響第459回定期は、まさにそのドイツ音楽を集めたプログラム。中でもＲ．シュトラウス《英雄の生涯》は、02年２月の仙台フィル第172回定期でも取り上げられ、若きコンサートマスター・西江辰郎の堂々たるヴァイオリンソロと相俟って、圧倒的な名演となった実績があります。

また、リスト《ピアノ協奏曲第１番》を弾くジュゼッペ・アンダローロは01年の「第１回仙台国際音楽コンクール」ピアノ部門と、翌年の「第５回ロンドン国際ピアノコンクール」で、それぞれ第１位に輝いた天才です。彼は同曲を、去る３月２日の仙台フィル東京公演（すみだトリフォニーホール、指揮：仙台フィル音楽監督　外山雄三）でも演奏し、ダイナミックな中にも色彩感溢れる快演で東京の聴衆を唸らせました。

以上のように、私たち仙台フィルが自信をもって送り出す二人の共演に、是非是非、足をお運び下さい。そして、彼らを始めとする多くの有能なアーティストたちとのコラボレーションを通じて、今や我が国有数のオーケストラの一つに成長した仙台フィルの“今”をご想像下さい。

梅田俊明さん

東京に生まれる。５歳よりピアノを始め、井上直幸、新井精氏等に学ぶ。1984年桐朋学園大学音楽学部を卒業。86年同研究科を終了。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、コントラバスを小野崎充、ピアノと室内楽を三善晃の各氏に師事。更に、83、84年には来日中のジャン・フルネ氏にも学んだ。また在学中よりＮＨＫ交響楽団においてピアノ、チェレスタ奏者として出演し、同楽団の推薦で86年よりウィーン国立音楽大学指揮科に留学、オットマール・スイトナー氏に師事し、研鑽を積んだ。帰国後、89年12月より92年４月まで大阪センチュリー交響楽団指揮者を務めた。

90年４月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者に就任。92年４月より96年３月まで神奈川フィルハーモニー管弦楽団の指揮者の任も果す。客演としては、Ｎ響、読売日響、東京都響等をはじめ、国内主要オーケストラとの共演を重ね信頼も厚い。

2000年４月より、10年間指揮者を務めてきた仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者に就任。

ジュゼッペ・アンダローロさん

1982年イタリア・パレルモ生まれ。2000年、ミラノのヴェルディ音楽院を最高の成績で卒業、数々の表彰を受けた。同音楽院ではヴィンチェンツォ・バルツァーニ氏に師事し、現在も彼に学んでいる。また、ブルーノ・カニーノ、ジェローム・ローウェンタール、ボリス・ブロックの各氏のマスタークラスを受講。2000年第17回ポルト市国際音楽祭ピアノコンクール（ポルトガル）で１位なしの第２位。01年第19回アルフレッド・カルセラ国際ピアノコンクール（イタリア）第１位。同年第１回仙台国際音楽コンクール第 1位。02年ロンドン国際ピアノコンクール第１位。

2000年イタリアのカイオ・メリッソ劇場で行なわれた「２つの世界祭　スポレート　2000」でデビューを果たし、聴衆や批評家から高い評価を受けると共に、作曲家のジャン・カルロ・メノッティの賞賛を受けた。ソロ、室内楽のほか、多くのオーケストラとも協演。現在、ヴェルディ音楽院の大学院に学ぶ一方、ヨーロッパ各地でコンサート活動を精力的に行なっている。

札響物語　24

札響で日本デビュー

～外国人指揮者編②～

【前回のつづき】

札響で日本デビューしたジェームス・デプリーストは大指揮者トスカニーニに「百年に一度しか聴けない素晴らしい声」と言わしめた、名コントラルト歌手マリアン・アンダーソンの母方の甥に当たる。もし、デプリーストにその気があれば、叔母の七光りを利用して、世界に名を売るのはた易いことだったと思われるのだが、89年に札響と共演するまで日本では名を知られていなかった。

札幌の姉妹都市ポートランド・オレゴン（P.O.）は80年から都市の再開発を推進し、地元オーケストラの充実をその核に考えた。オーケストラの再建を委ねたのは、全米一のリフト・メーカー「ハイ・スター」の社長をしていたジム・フロンク、そのジムが三顧の礼を尽くして音楽監督に迎えたのがジェームス・デプリーストだった。

私が88年９月３日（土）～５日（月）にP.O.を訪れた時、レイバー・デイ（９月第１月曜日）を含めた３日間を「Artquake（造語 Art＋Earthquake)」と称し、街を挙げての芸術祭が繰り広げられていた。

ブロードウェイの両側には、北海道神宮例祭の中島公園と同じような小屋掛けが並び、大変な賑わいだった。小屋掛けの中には、京都という名のすし屋やお好み焼屋まであった。

道路の中央部分に芸術団体のテント張りブースが並び、更にブースの切れ目では、終日路上パフォーマンスが人だかりを呼んでいた。市民だけでなく、近くの町やカナダなどから集まった人達だった。

ブロードウェイに面した一丁四方のサンクガーデン式野外劇場ではジャズバンドが演奏し数百人の聴衆が階段状のスタンドに座っていた。

街の印象は75年に札響が演奏に訪れた時の、うらぶれかけた街から、丹念にデザインされたハイカラな街に衣替えをしていた。

「Artquake」の締めくくりは満々と水をたたえて市内を流れるコロンビア川畔でのオレゴン響（OS）の野外演奏会だった。開催の前から、大きな指揮者が指揮台の椅子に座っていた。４万人もの市民が会場につめかけ、時間になってオーケストラが並び、アメリカ国歌の演奏が始まった。聴衆の拍手と視線に釣られて川を向くと、ヨットの上の巨大な国旗がスポットライトに照らされ、国歌に合わせて川面を走っていた。

フィナーレは、チャイコフスキーの序曲「1812年」。演奏の前に陸軍砲兵隊員がオーケストラの前に整列し、出演者として紹介された。曲の中で撃ち鳴らされるカノン砲は絶妙のタイミングで、腹の底まで揺すられる良い音だった。

指揮者は、終演まで指揮台から降りて来なかった。下半身不随のデプリーストだった。

ハリウッド映画張りの派手な演出に終始したが、目先の賑わいとは別に、オレゴン響の演奏は目を見張る見事なものだった。

75年頃には、名も無いポートランド交響楽団があった。ポートランド響はオレゴン交響楽団と名を改め、1917年に建てられた、エントランスホールの足元のモザイク模様が美しい、パラマウント映画の直営館が、オレゴン響のコンサートホールに改修されていた。

10年足らずの短期間で、全米のメジャーオケの仲間入りするほどに成長したのは、理事長のジム・フロンクの優れた政治的な手腕と、音楽監督ジェームス・デプリーストの類まれな芸術性と指導力の賜物だった。

デプリーストは、64年ミトロプーロス国際指揮者コンクールで、エド・デ・ワールト（ＰＭＦ2003に参加）と共に１位を分け合った実力者だった。

20歳の時ポリオに罹り、下半身が不自由になったのが、世界に打って出なかった一因のようだ。

帰国後すぐに招聘の手配をし、翌年札響定期のためだけに来てもらったのだった。

（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　トランペット副首席奏者

佐藤（さとう）　誠（まこと）さん

ご出身はどちらですか

鹿児島市で生まれ育ちました。中学校卒業まで、ずっと鹿児島でした。

音楽との出会いは

実は、私は音楽が大嫌いで、小学校に入ってから歌を歌う時声が出ず、いつも放課後残されて担任の先生に特訓されたりしていたんです。３年生の時に国体がありまして、小学生の鼓笛隊バンドの募集があったのですが、先生に「お前は音楽が嫌いだから音楽をやってこい」とハッパをかけられて、トランペットを吹かされることになったのです。

私にとっては、自ら望んだ訳でありませんでしたが、それが音楽とトランペットとの出会いでした。

ずっとトランペットを続けたのですか

小学校では鼓笛隊バンド、中学校では吹奏楽部で続けました。田舎なので我流でやってましたが、中学校の最後の半年ほど教えてもらう人がいて、出来ればずっと続けたいと思い込むようになりました。

将来音楽大学をと考えたのですか

いえ、この世に音大の附属高校があるということを知り、やるなら高校から専門的にと思い、普通高校の進学はやめました。でも、必須のピアノも何もやってませんでしたから、単身上京し、１年間自炊しながら先生について猛勉強し、翌年幸運にも東京芸大附属高校に合格できました。その後芸大に進学し、卒業しました。

札響入団のいきさつは

大学卒業後１年くらいフリーで活動していたのですが、木曽福島の音楽祭に参加した時、当時札響首席の杉木さんも出演されていて一緒に演奏する機会があり、大変貴重な体験をしました。その後、杉木さんの退団に伴うオーディションを知り、応募しました。

入団してみていかがでしたか

凄いプレーヤーがいる地方オケのトップという意識がありましたから、最初は、私にとっては敷居が高いという感じがありました。でも、それを超えると本当にフレンドリーな、いい雰囲気のオケだということが分かりました。

今までの演奏で特に思い出深いものは

どの演奏もそれぞれに思い出がありますが、92年の「アルプス交響曲」です。ベルリンフィル首席のクレッツァーさんの隣で２番を吹けたというのは、私のトランペット人生で大きな転換点になったと言って良いと思います。あとは一昨年の英国公演での演奏ですね。

何か趣味はお持ちですか

北海道に来てからですが、支笏湖でフライフィッシングというものを初めて見てやりはじめ、釣りが趣味になりました。冬には娘とワカサギ釣りにも行くんですが、氷の上にのって穴を開けてなんて、私の故郷では考えられません。そのうちには鮭釣りに挑戦してみたいと思っています。

札響の危機については

確かに厳しい状況ですが、今、皆で変わろうと様々な試行錯誤をしてますね。それが本当に正しい選択なのかは誰にも分かりません。しかし、現状を負の考えでとらえるのではなく、逆に、新たな一歩を踏み出せるきっかけとしたいと思っています。

札響くらぶに一言

本当に心強い存在と感謝しています。会員の皆さんに、実際に楽器に触れて音を出していただく、音楽教室のようなことが出来ればいいですね。

札幌交響楽団　ヴィオラ奏者

辻（つじ）　彩子（あやこ）さん

ご出身はどちらですか

関西の兵庫県尼崎市です。一時神戸に住んだこともありますが、高校生くらいからはずっと尼崎でした。

クラシック音楽との出会いは

兄がヴァイオリンを習っていたので、私も４歳の時からヴァイオリンを習いはじめました。

ずっと音楽をやっていこうと思ったのは

実は大学に入る頃に、なかなか上達しないこともあって、一時音楽をやめてしまおうかと思ったことがあるんです。でも、教育大学の音楽課程に入学して、徐々に音楽の魅力を理解しはじめました。それまでは、親に無理やりやらされているという意識があったのですが、その頃からは自分でやりたくてやっているのだからずっと続けようと思うようになりました。

ヴィオラになったのは

大学のオーケストラの授業では、ヴィオラもやらされるのですが、最初は私は体も小柄だし、ヴィオラは楽器が大きいのでいやだと思っていました。ある時に友人たちにアンサンブルをやろうと誘われ、ヴィオラを受け持ったのですが、その時に「あっ、この楽器好きだな」と突然思ったんです。その頃兄もヴィオラに変わっていて、学校の備品の楽器ではなく、兄の楽器を弾かせてもらったらとても感動してしまって、ああすごいなと思って、それからヴィオラをやろうと思いました。

札響に入団されたいきさつは

大学卒業後、大学院で２年間勉強を続け、終了後１年間はフリーで関西で活動していましたが、ずっとオーケストラに入りたいと思っていました。入りたいオーケストラの一つが札響で、たまたまその時にオーディションがありました。周りの人達にも勧められ、大フィルにいた広狩さんというすごい人とも一緒に弾けるという魅力もあり、チャレンジすることにしました。

入団前の札響のイメージは

雑誌で英国公演の様子を読んだりして、透明な音のするオーケストラというようなイメージがあり、ああすごいなと思っていました。そして本拠地のキタラホールも素晴らしく、こんなオケに入れたらいいなと思っていました。

何か趣味はお持ちですか

特定の趣味といえるようなものはありませんが、その時々で夢中になるようなものはたくさんあります。ある時は料理であったり、ドライブであったりという具合ですね。最近は、別にパソコンが趣味という訳ではないのですが、ホームページを作りました。目下のところはそれが趣味ということになります。

札響の危機についてはどうお考えですか

危機ということになって、まず一番身にしみて思ったのは、応援して下さる方がこんなにたくさんいるということでした。本当に嬉しく思いました。応援して下さる気持ちだけでも有難かったし、実際的な面でも様々に助けて下さる方々がいて、本当に感謝しています。私たちプレーヤーは、そういう応援して下さる方が、ああ応援していてよかったなと思って下さるようがんばらねばと思っています。

札響くらぶについて一言

本当にありがたい存在だと感謝しています。東京や大阪のオケとは違い、わが町のオケという感じであたたかく見守って下さる方がいるというのは、励みにもなりますし、オケとファンのこういう関係っていいなあと思っています。

（佐藤良次）

from 「札響くらぶ」

上田会長が札幌市長に就任

ご承知の通り、上田文雄会長が今春行なわれた札幌市長選挙に立候補され、政令指定都市では初めての再選挙を見事に制し、めでたく当選されました。

今後上田会長には札幌市政の推進役として強いリーダーシップを発揮されるよう多くの市民が期待していると思いますが、公約に掲げられた「文化・芸術を発信する都市」を自ら実践する意味でも、引き続き当くらぶ会長としても頑張っていただきたいものとスタッフ一同期待しています。

上田会長から会員の皆様に、下記の通りメッセージをいただいておりますのでご紹介いたします。

札響くらぶ会員の皆様へ

この度は私自身思ってもおりませんでした札幌市長選挙への立候補ということになりまして、会員の皆様には多大のご心配をおかけしたことと思います。まずもって皆様におわび申し上げますとともに、多くの会員の皆様に暖かいご声援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

私が立候補を決意するに至った大きな理由の一つは、文化芸術の振興を街創りの中でしっかりやっていかなければならないということでした。そのように考えるに至ったのは、札響の存在であり、多くの皆さんのご理解を得ながら、７年にわたる立ち上げから今日に至る札響くらぶでの活動の体験でした。そして、それは今市民の皆様に呼びかけている私の訴えの中核をなしています。その意味からも、これからも変わらずに札響を大切にし、札幌の文化の創造にがんばっていきたいと思っています。

私の札響くらぶ会長という立場につきましては、まだ若干の不確定要素がございます。市長になるに際して、それまで引き受けていた各種の市民運動やＮＰＯの役職などはすべて退任いたしました。いまだに続けているのは唯一札響くらぶ会長だけです。札響くらぶの活動は、政治的なものでも、営利を目的とするものでもありませんので、市民の皆様にはご理解いただけるのではないか、任期もあと１年残っておりますので、会員の皆様のご了解をいただけるならば会長職に留まりたいと、私自身は考えておりますが、最終結論までにもう少し時間をいただきたいと思っております。

今、札響の危機が報じられておりますが、札響の事務局も新体制になり、再生に向けてしっかりと歩み出しています。そうなったことについても、私は我々札響くらぶの力があったのだと思っています。また、仙台フィルのファンクラブとの交流のため、仙台訪問を検討しておられるとのことを、私はそこまで活動の広がりができてきたのだなあと、感慨を覚えるとともに心から喜んでおります。札響くらぶの活動をやってきて、本当によかったなと思っています。

札響くらぶの活動の成果は、着実に、確実に現われてきていると思います。今後とも会員の皆様のご協力を得て、当くらぶの活動をますます発展させていきたいものと考えております。そのためには、どんな立場になろうとも、私にできることはしっかりやっていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

札響くらぶ会長　**上田　文雄**

編集後記

上田会長に市長室でお話を伺ってきました。テレビ画面で見てイメージしていたよりもずっと質素な部屋で、少し驚きました。

マスコミで報じられている超多忙な毎日で、すっかりやつれてしまわれたのでは、と心配していましたが、思いの外お元気で安心しました。長期の選挙戦の疲れも徐々に癒えているそうですが、市長就任以来１日も休日がないそうで、気の毒に思いました。札響のためにも元気で頑張ってほしいものです。　（佐藤良次）

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終ったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は11月発行の予定です。